

まちづくり あいかわ

～ 歴史的資源を活用した地域活性化の活動報告 ～

— 56 号 —

発行所 佐渡市相川支所
〒952-1592
佐渡市相川栄町 27 番地
TEL 0259 (74) 3111 (代)
FAX 0259 (74) 2551

「一般社団法人 相川車座」は

「一般社団法人 金継」(きんつぎ)に名称変更します

平素より、地域づくりの活動にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。

これまで「相川車座」は、古民家等の歴史的資源を活用した地域産業の活性化や移住者・滞在者の増加を主な事業として展開する「株式会社 相川車座」と、歴史や文化の継承・発展と地域環境や暮らしの充実を主な事業として展開する「一般社団法人 相川車座」の両輪で、まちづくり(地域づくり)活動に取り組んできました。

この度、「一般社団法人 相川車座」は名称を変更し、「一般社団法人 金継」(きんつぎ)として新たに活動を再出発することになりました。

これまで、株式会社と一般社団法人の2つの相川車座があることで、住民の皆様から「分かりにくい」とのご意見を多くいただいております。その声を真摯に受け止め、よりシンプルで分かりやすい形で活動を進めてまいります。

今後は、住民の皆様が参加できる企画やイベントも検討しております。小さな一歩を積み重ね、この相川のまちがこれからも続いていくよう、できることから着実に取り組んでいきたいと考えております。

また、募集しておりました地域おこし協力隊については、10月から採用が決定しました。新しい仲間が相川に移住し、一緒に

地域を盛り上げてくれることになりました。温かく見守っていただければ幸いです。

引き続き、皆様とともに歩むまちづくりを目指してまいります。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

一般社団法人 金継

着任のご挨拶 地域おこし協力隊 新保(しんぼ)です

相川の皆様、はじめまして。

この度、「相川地区の地域おこし協力隊」になります、新保(しんぼ)と申します。生まれは兵庫県、育ちは東京の東村山です。ザ・ドリフターズの東村山音頭のところです。

親族が佐渡出身で、私自身昔からよく佐渡に来ていました。小学生時代の夏休み、まるまる1ヶ月くらい佐渡に来て、海に行ったり父の畑仕事を手伝ったりしたのが良い思い出です。

その頃に見た佐渡の原風景や京町通りから眺望できる夕日が忘れられず、社会人になってからも好んで佐渡に来ています！特に、趣ある景観に溢れる相川エリアが大好きなので、この度「相川地区」の地域おこし協力隊になれたこと、嬉しい限りです。情緒溢れるお店や景観

がギュッとつまっている相川地区の良さを、発信していける存在になればと思います。

人とお話すること、色々なお話を聴くことが好きなので、相川地区の皆様、これから新保(しんぼ)をどうぞよろしくお願いいたします！



【開催時間】10月12日(日) 16時00分～21時00分
【お問い合わせ】090-7437-14993 (佐渡國相川あきんど会事務局)

空き家図書館 10月イベント開催案内

▼「*I Love this book*」(大好きな本を紹介し合うイベント)

自分のお気に入りの本を、誰かに紹介してみませんか?

ジャンルは問いません。持ち物は、好きな本を1冊〜3冊。参加者同士でおすすりポイントを語り合い、新しい本との出会いを楽しむ交流会です。

【日時】10月25日(土) 14時00分〜15時30分

【場所】空き家図書館 京町ものがたり 相川中京町29-3

【持ち物】大好きな本(1〜3冊ほど)

【一人当りの本紹介時間】15分ほど

【お問い合わせ】09074374993 (参加申込不要・参加費無料)



空き家図書館
インスタグラム

▼「クジ読」

クジを引いて、そこに書かれた本を読んでみる「偶然の出会い」を楽しむ読書会です。普段なら手に取らないような一冊との出会いから、新しい世界が広がるかもしれません。

【日時】10月26日(日) 14時00分〜15時00分

【場所】空き家図書館 京町ものがたり 相川中京町29-3

【お問い合わせ】09074374993 (参加申込不要・参加費無料)



地域おこし協力隊伊藤幹太の相川商人図鑑 Part 4

「生そばとみ」 感謝の心で暖簾を守る

相川の町で、長年にわたり人々の暮らしに寄り添ってきた「生そばとみ」。その歩みは昭和43年にまで遡ります。米屋と蕎麦屋を営んでいたお祖父様が、家庭の事情から独立して蕎麦屋を開いたのが始まりでした。場所を移しながら暖簾を守り続け、平成元年には現在の地に根を下ろしました。

やがて店を継ぐこととなったのが、現店主の林峰一さんです。若き日、東京で始めた修行は、やがて蕎麦の奥深さに魅了される

日々となりました。出汁の香り、手打ちの妙。その世界にのめり込み、家庭の事情から23歳で故郷の店に戻ることを決心します。最初のうちは「手打ちと機械打ちの二種類でやりたい」と考えていました。しかし、お父様が癌で亡くなり、もともと機械打ちだったこともあり、「ここで広げても」と思い、手打ちは断念。そのまま機械打ちで今日まで続けています。父が築いた味を大切に、お客様に喜んでもらえる工夫を重ねながら暖簾を守り抜いてきました。

今は奥様とパートさんと共に三人で店を切り盛りし、主には地元の常連客に支えられています。観光客の団体からの問い合わせがあっても、「地元のお客様を優先に」と断ることもあるほど。そこには「毎日通ってくださる方々に支えられている」という感謝の思いが根付いています。

数ある品の中でも、峰さんが胸を張ってすすめるのは冷たいかけそば。わずか390円ながら、つゆの旨みと麺のコシを存分に楽しめる逸品です。一方で、具材たっぷりの



「オールそば」も常連さんに人気の一杯。きつね、天ぷら、山かけ、生卵などをすべて盛り込んだ豪華版で、「あれも入れてほしい」「これも食べたい」といったお客様の声にこたえて誕生しました。そこからカレー丼、肉玉丼なども次々と生まれ、今では店の名物となっています。

価格についても「常連さんに負担をかけたくない」との思いから、十数年に一度しか上げていません。「裕福になろうと思えば



いくらでも上げられる。でも毎日来てくださるお客様がいるからこそ、このままでいいのです。」と、峰さんは穏やかに語ります。その言葉には、商売を超えた人と人との絆がにじみます。峰さんが相川を離れたのは、若い頃に東京で修行した5年間だけ。それ以外はずっとこの町と共に生きてきました。「夕日がいけないで、自然も豊か。人の情に厚くて、面倒見がいい。そんな相川の人たちが大好きだから、よそで店を出そうとは思わない。」と話します。相川祭りでは昭和50年頃から洗濯工場で「とみそば」のそばが御神輿を担ぐ人に振る舞われるようになり、今では町の風物詩のひとつとして受け継がれています。

また、コロナ禍の苦しい時期にも「常連客の皆様が支えてくださったお陰で苦難を乗り越えられた。」と語ります。

「これからも、来てくださるお客様に喜んでもらえる品をつくり続けたい。」その言葉の奥にあるのは、日々を積み重ねる誠実な決意。変わらぬ味と変わらぬ想いが、今日も息づいています。

最後に、峰さんから町の皆さまへ

「いつもご贔屓にしていたいて、ありがとうございます。これからも頑張りますので、どうぞよろしくお願いします。」



あいかわ道草話

金北山参りと女性

金北山、標高1172m。佐渡の最高峰です。古くは北山（ほくさん）と呼ばれ、各派修験者（山伏）の信仰・修行の中心となっていた霊山でした。

そのため、佐渡では男の子が7歳になると父親と共にオヤマ（金北山）参りと称し、山頂の本社にお参りする風習がありました。

旧6月24日の金北山の祭礼日に、まず海岸で潮浴びをして身を清め、浜石を数個持つて山頂を目指します。山頂に到着すると小石を積み上げ、本社を参ってから、石楠花（しゃくなげ）の枝を切り、花を逆さに背負って家に帰ります。石楠花は床の間に飾り、親戚にも配りました。

ただ、金北山は女人禁制の山。もう一つの霊山である妙見山（標高1055m）は、女性は参ることはできませんでした。

事件が起きました。天明7年（1787年）7月18日、相川柴町の「いち」という女性が、他国から来た千か寺参りの者たちと一緒に金北山二ノ嶽にある法華塚に参拝し、山頂までは近かったのですが、女人禁制の本社を参拝したのです。家に帰ると彼女は、近所の者を招きフルマイをして、「これまで女の金北山参詣は難儀のようであるが、これは昔からのならわしで、そのようないことはいい。信心で参るのならばよからう」と語り、その後何度もオヤマ参りを続けました。そのことが、佐渡奉行所役人の耳に入ります。7月末、奉行所に町内の役目の者が呼び出され、色々と申し開きをします。

しかし、彼女は御白洲へ呼び出され、「金北山は女の不行所（女人禁制）と定まっている。ここに参詣したのは不束（ふつつか）である」として「お叱り」の処分を受けました（『佐渡国略記』）。これは、彼女が参拝を強行したのもさることながら、本社に貼札をしたことが許せなかったことのようにです。以来、女人禁制がより一層厳格化されたのです。

10月3日が「登山の日」にちなんでのお話でした。



金北山 世阿弥の『金島書』には「北山」と記されている